

目的 社会構造の進化高度化，および国際化の進展に対応し，家庭科を男女とも高等学校まで必修で学ぶことになったが，これは生活意識の転換と生活重視の教育の必要性が具現化されたものと言える。それゆえ，家庭科の教科内容の見直しが急務の課題であるが，ここでは被服領域に関して，日米の教育を比較しながら中・高校における被服教育のあり方について検討することを目的とした。

方法 日本とアメリカの中・高家庭科の教科書およびその指導書に基づき，日米の被服教育について比較分析し，検討を行った。

結果 アメリカの教育は一般に目的志向型で，実利・能力主義的であり，創造力の養成に力点がおかれた柔軟性のある教育といわれるが，被服教育においてもそれが表れている。以下，日米の比較をふまえて今後の被服教育の具体案を列挙する。①自分を美しく魅力的に表現するための被服の着こなしとは：被服のみに着目せず，体型，皮膚，爪，歯，髪などにも気を配り，食事，運動，睡眠が適当に行われてはじめて達成されると説く。②自分にあつた被服を選択購入するには：色，デザイン，素材，付属品を総合して選び，消費者としての正しい知識をもとに，適切な判断ができる能力を身につけることが肝要と説く。③購入後，できるだけ新品同様の状態で長く使用するには：取り扱いラベルの指示に従いしみぬき，洗濯を適切に，合理的に行うことが大切と説く。④縫製技術を身につけるには：ミシンに慣れ，被服パターンと体型との関係について理解し，製作を楽しむ中で習得されると説く。このように，学習意欲の促進と総合的視野にたつた被服教育が望まれる。